ジャワの山は整形美人

2020年4月
石原勝巳氏の随筆を転記

山々が耕地として彫（ほり）たくされている。啞然とする光景である。なんと山麓から山頂までくまなく。日本ではありえない光景だ。中部ジャワのディエン高原（ヒンズー遺跡群）を訪れたときのことである。写真に納めようとしたが、千慮の一失（せんりよのいっしつ）で断念せざるを得なかった。バッテリーが切れていたのだ。アスタガ（オーマイゴッド）。

思うに、これが可能なしかけがこの熱帯地域には何かあるのだ。一言で言えば小生自身、地味（ちみ）がすごいということだろうと思った。

「インドネシアを囁（ささや）かじる」というエッセーの中で（79 p）、加納啓良氏は次のように記している。「（ジャワの）山麓を徘徊するとすぐ目につくことだが、どの山も中腹のかなり高いところまで耕地が開墾され、ヤシの木陰の集落にたくさんの人々がへばりついて暮らしている。こんなことは日本の火山ではありえないことだ。日本の火山山麓の地域では地味が痩せている上、水が乏しいので米が作れず、人がたくさん住むのには適さないところばかりだ。ジャワはさにあらず、ということは火山の性質がずいぶんちがうということになる。まず土の違いである。強酸性の日本の火山灰土と違って、ジャワの火山灰は、窒素などの作物の育成に必要な肥料成分に富んでおり、水さえかかれば人が肥料を入れてやらなくてもかなりの収量が約束される。バリも同様で、古くから水田耕作が発達したのは、火山灰土のおかげだという。」「次に水である。ジャワやバリの火山は中腹の至るところから水が湧き出し、実にたくさんの川となって麓の耕地を潤している。専門家の話では、ジャワの火山は自然の営みを作り出した巨大な貯水池のようなものだという。雨季に西風が運んでくるたっぷり湿った大気は、火山の山腹にあたって大量の雨を降らせる。その雨水が地下にもぐって火山の下に蓄えられ、泉となってしみ出すのである。乾季でもこのことはあまり変わらないという。」「三番目が気候である。ジャワの火山の中腹も涼しいが有史以来雪の降ったためしはあるまいし、海拔1500メートルちかくまで米が作れる。米が無理でも、それに代わる作物ができる。ジャワの火山は遠い昔から、人々を慈愛深くはぐくんできた。」とあり、疑問が解けたようだ。天の配剤（はいざい）、自然の恵みというのはまさにこのことだろうと思わざるをえない。

美しいライステラス（棚田）の光景よりも、こちらの光景のほうが強烈な印象を与えること

間違いないと思った。それゆえ、その証左をなんとしても写真に納めたかった。
かえすがえすサヤン（残念）である

（注）

彫たく（ほりたく）： 刺青のこと

千慮の一失（せんりょのいっしつ）： ときには思い違いや失敗することがあるということ

地味（ちみ）： 土地の良し悪し、土地の生産力

天の配剤（はいざい）： 自然の成り行きとは思えないほど適切に配されているさま